



技桑物系集  
二  
十一

伊地知文庫  
文庫20  
360  
24



扶桑拾葉集

扶桑拾葉集卷第二十一

目錄

嘉吉二年款合序

文安詩歌合序

雲井乃春

少一寺之序

元鳥餘情序

南都百首序

由一河乃記

藤原兼良

同

同

同

同

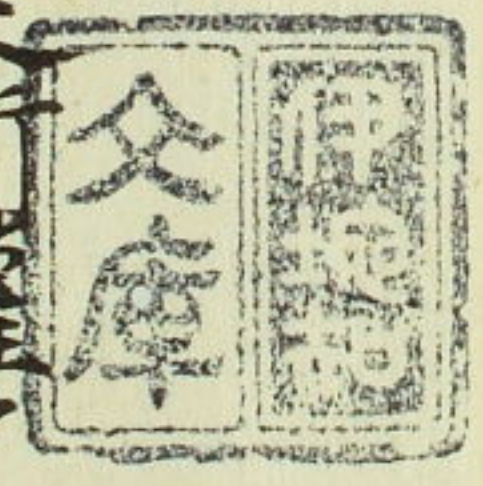
同

同

草根集序  
 古今童蒙抄序  
 教林良材集序  
 福とめ乃記序  
 勸修念佛記序  
 仙洞歌合跋  
 竹林抄序  
 世諺同言序

同 同 同 同 同 同 同

扶桑拾葉集卷第一



參議從三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集  
 嘉吉二年秋合序

藤原重良

此由し哥の河の流らむき神代より我思はむ人の志らむ也女まはれは是との女はむ何の若はらむ女女も深し是とまひむらむらむは情あぬ人こゝろの如くはむの美の若女何れもか萬葉集とてむらむ初撰しむらむ何れもか今昔の如きはむらむ志はむらむ





文安詩歌合序  
 同  
 詩歌合しよものふ上古も有と云ふは  
 中つ河建仁の孫政よれたてと云ふ  
 後元久の上皇也れんをりはかま  
 考し今もなをてを業と

神のそらめ給ふたむもうてわはよ有と云  
 く是れむのそらめらるはと云ふ唐の夢の  
 境もいそむもくわもめや・顔氏と云  
 夢ときか事程すあひさかま・其のそら  
 とく大徳白皇子の歌謡と云ふ・神よつ風  
 と云い鹿とついで長業・んわあまはけ  
 とめん具後弘行の帝にたれん代も・末法の西  
 門南子の儒士と云ふ・舟のほおと云ふ・去ぬ  
 浪波と去のたりのたては・語さひりきか  
 神不えわらちめま河もはける也・白樂天を徵  
 之・詩の時より前もあまきと云ふ・海雲









とくつら〜つひてあかやあやま・御方あはせ〜つかういひせり。せ  
や〜つひてはしん・御」よかあまあまの御方あはせり。あはせり  
御まうのはあかや〜つひて御の御門のつららは法所の  
まのま・女とまをわ〜つひて車〜つひて御の御方あはせり。まの  
と〜つひてはしん・御」よかあまあまの御方あはせり。あはせり  
〜つひてはしん・御」よかあまあまの御方あはせり。あはせり  
まのま・女とまをわ〜つひて車〜つひて御の御方あはせり。まの  
と〜つひてはしん・御」よかあまあまの御方あはせり。あはせり  
つらら〜南上西面は山の上の御方あはせり。あはせり。あはせり。  
親王大良の丸と南東上南面はあはせり。あはせり。  
〜つひてはしん・御」よかあまあまの御方あはせり。あはせり。  
と名の上はあはせり。あはせり。あはせり。あはせり。あはせり。あはせり。  
〜つひてはしん・御」よかあまあまの御方あはせり。あはせり。

の丸と南上西面は山の上の御方あはせり。あはせり。あはせり。  
親王大良の丸と南東上南面はあはせり。あはせり。  
〜つひてはしん・御」よかあまあまの御方あはせり。あはせり。  
と名の上はあはせり。あはせり。あはせり。あはせり。あはせり。あはせり。  
〜つひてはしん・御」よかあまあまの御方あはせり。あはせり。  
つらら〜南上西面は山の上の御方あはせり。あはせり。あはせり。  
親王大良の丸と南東上南面はあはせり。あはせり。  
〜つひてはしん・御」よかあまあまの御方あはせり。あはせり。  
と名の上はあはせり。あはせり。あはせり。あはせり。あはせり。あはせり。  
〜つひてはしん・御」よかあまあまの御方あはせり。あはせり。



















侍史・引・さ・め・く・ら・く・い・か・ら・半・七・侍・人・

人之装束并鞋色事

後花園院  
主上

御直衣半色御指貫窠裏  
文無文燠革御鞋有伏紐

伏見殿  
式部卿宮

直衣薄色指貫雲立  
涌文有文紫革縫物

近衛殿  
前関白

直衣有文  
紫革縫物

一条殿  
内大臣

衣冠  
錦革

室町殿  
大納言

直衣薄色指貫有文紫革縫物  
菊折枝有伏紐今度自上給之

三條  
帥大納言

直衣有  
文紫革

德大寺大納言

直衣藍  
白地

日野大納言

直衣  
錦革

今出川大納言

衣冠  
錦革 今度被聽之

善名不見

三條中納言

直衣  
錦革 今皮被聽之。

飛鳥井中納言

雅親  
衣冠汗取惟淺黃織物指貫有文紫革  
縫物唐草有伏組自文樹被調下之

耳露寺  
左大辨宰相

親長  
直衣藍  
白地

圓宰相

基有  
衣冠藍  
白地

山科  
右衛門督

顯言  
直衣藍  
白地

正親町西  
公澄朝臣

參議中將  
衣冠藍  
白地

殿上人

滋野井  
教國朝臣

衣冠藍  
白地

高第  
永繼朝臣

衣冠藍  
白地

飛鳥井  
雅康朝臣

少將  
衣冠錦革有伏組自  
大樹被調下之

賀茂輩

夏久縣主 錦華

勝久縣主 藍白地

秀久縣主 錦華

益久縣主 以下皆白地

增平縣主

延隆縣主

<sup>鴨</sup>彌久縣主

富祐縣主

宮久縣主

以上衣冠

見證公卿

<sup>一條</sup>關白 兼良

平縮直衣指貫

鷹司 房平

左大臣 直衣

<sup>二條</sup>持通

右大臣 衣冠

<sup>三條西</sup>

武者小路前内大臣 <sup>公保</sup> 平縮直衣白綾指貫

三條前内大臣 <sup>實量</sup> 直衣











仁家おかしら領主のこころとあつらひて半好の  
こころはわがこころに半好の女ありて地

ゆいませうに世の縁ゆいませう  
及ぶゆいませうに女

作夢の玉・何を言ふ事わが女はわが女はわが女は  
一書かこころの女はわが女はわが女はわが女は  
くさかまこころの女はわが女はわが女はわが女は  
とくはわが女はわが女はわが女はわが女はわが女は  
夜とわが女はわが女は

形書て雨の降る女が宮城  
あまこころの女はわが女は

三言あまこころの女はわが女はわが女はわが女は  
かこころの女はわが女はわが女はわが女はわが女は  
不ことこころの女はわが女はわが女はわが女は  
者成礼一とき

ゆいませうに女はわが女はわが女は  
けいこころの女はわが女はわが女は

濱の園とわが青蓮院の女はわが女はわが女は  
松本とわが大津の女はわが女はわが女はわが女は  
清の神代わが女はわが女はわが女は

くさかまこころの女はわが女はわが女は  
おぼろの女はわが女はわが女は

かゝしてとれ夜に板木の着まをゆつぬ七の節に  
とめしとめりたてをすて

老う身とて人あをほ板切り  
杖もきれいせり神とに

冒板本とて毎日のことし

ゆづりやまきと目らりの祈り  
さいう勢とこれ度ゆり松

ゆれも須風をきれなむと船と行てはく豊  
の浦と船とら勢と

うかひのうらまのうらまの  
目まのうらまのうらまの

ゆれしとれ夜に板木の着まをゆつぬ七の節に  
とめしとめりたてをすて

毎日のことし  
老う身とて人あをほ板切り

杖もきれいせり神とに  
冒板本とて毎日のことし

ゆづりやまきと目らりの祈り  
さいう勢とこれ度ゆり松

ゆれも須風をきれなむと船と行てはく豊  
の浦と船とら勢と

霜の下のうねる。まよてむらり母のうねる。ゆき  
ゆきゆきの養老の湯。海にゆきゆきとゆく。志らるる  
うねる。

夏の日しむる。こころに氷の中  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
若き子とわらわしあはる。舟の  
かきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

かゝる原ゆき

吹風やまにこぬ秋はゆきゆき原  
葉のゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

右のゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
二のゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
浮城橋下とよみゆきゆきゆきゆきゆき  
更圓よりゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
母山小神やゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきのゆきゆきゆきゆきゆき  
言叶ゆきゆきゆきゆきゆき

夏の日しむる。こころに氷の中  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
藤川の橋ゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

あゝはあゝなる藤川のうら  
思ふ若むゝあゝあゝあゝ  
万代らららるるせあれ後川

うらららららららららら

白浪のこゝれ岩根のあゝあゝ  
らららららららららららら

野上几葉也あゝあゝあゝあゝ

旅人あゝあゝあゝあゝあゝ  
野上の几葉よあゝあゝあゝあゝ

昔清見原の天皇・東宮の位と輝く  
野山よあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
伊賀伊賀の風はあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

不彼の美色とてはなほあり。あまのこころにわづらひておぼしめし。  
あはれなるあり。中津門移設のあはれあり。後のあまの  
目とてなほあり。半ねと思ひあはれをせしめし。

あはれは。あまの美色の板印を  
久しとて若とてあまのこころに

美色の甲子らわたりて。あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。  
あはれとて。あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。  
あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。

清見原とて。あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。  
あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。

あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。  
あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。  
あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。  
あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。

あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。  
あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。

あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。  
あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。  
あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。

あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。  
あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。あまのこころに。

わさねはつらり・あまの原とよはれぬ・むらさき・よのぬの  
あまのつらり・あまの原とよはれぬ・むらさき・よのぬの

あまのつらり・あまの原とよはれぬ・むらさき・よのぬの

あまのつらり・あまの原とよはれぬ・むらさき・よのぬの

あまのつらり・あまの原とよはれぬ・むらさき・よのぬの

あまのつらり・あまの原とよはれぬ・むらさき・よのぬの

あまのつらり・あまの原とよはれぬ・むらさき・よのぬの

あまのつらり・あまの原とよはれぬ・むらさき・よのぬの

あまのつらり・あまの原とよはれぬ・むらさき・よのぬの

あまのつらり・あまの原とよはれぬ・むらさき・よのぬの

あまのつらり・あまの原とよはれぬ・むらさき・よのぬの

あまのつらり・あまの原とよはれぬ・むらさき・よのぬの

あまのつらり・あまの原とよはれぬ・むらさき・よのぬの

あまのつらり・あまの原とよはれぬ・むらさき・よのぬの

あまのつらり・あまの原とよはれぬ・むらさき・よのぬの

くきぬんきん

八日法寺よりつゝ。母の福刺の湯也。由良川後母  
て山號とく靈樂山とす。國中最初の福刺なり。  
かゝるに新造の一素ありと休布ありては子  
まもむ。胡々の由もあはれ。くしきぬんきん  
ぬんきん。りりり。同のりりり。のりりり。  
くきぬんきん

九日教の披海りり

十日連教百顔あり

十日法寺のいりり。城とほは地と深して。軍  
壘のあまんとあせり。とあせり。舟とあせり。あせり

くきぬんきん。傍部はく。子居。唐あり。山居のよ由あり  
まゆい。後周ありりり。お佛堂の海吉の二味と  
ちあせり。と見あり。岩地の本尊とおか。いりり  
唐書ありりり。法城と云ふ字とは。りりり  
亦後部西市利國の傍部り。控あり。控あり。と  
人の彼よりて。人伝あり。つり。か。い。武具と  
りりり。りりり。りりり。りりり。りりり。りりり。  
りりり。又見日教舞のりりり。りりり。りりり。  
は。りりり。酒宴の真と。りりり。美伊法師と。りりり。  
りりり。源成粒の皇男生年九歳也。回雪の神と。りりり。  
りりり。りりり。りりり。りりり。りりり。りりり。



比東三條女院の御堂の式楽也。御堂関白の長男也。宣法親  
十歳のわらしめて陵王とまゝい。次男西行左大臣也九歳よして  
幼獲利と稱し。年思ひいふとれ流る。古の舞と今の  
舞といふつらひ是ゆみかた。かゝる。いふれい。少年の  
人との骨はえして。人と感歎せしむ。年々。奥曲月と  
伊ふつとす也。

十二日猿樂何り。考甚し。猿樂之ニ場々。好更存  
法師又。舞者をして袖と申す。之を猿樂子ばら。子  
由き。心く。人々感。し。き。字。流。如。し。真。子。入。を  
く。く。し。竟。く。り。

十二日正法寺より。短冊の評り。詩歌。龍瓦。硯。あり。

この硯ハ東坡の詩集よ。か。も。く。也。り。硯の。は。は。し  
左。向。り。柳。作文の。年。久。く。筆。とき。く。と。く。て。り。し  
か。く。し。か。く。顔。の。か。く。も。わ。く。し。て。ぬ。れ。し。信。都。志。り  
母。す。め。は。れ。ん。也。八。字。法。由。り。か。く。し。ね。あ。は。ら  
字。め。り。又。方。丈。の。前。子。二。株。の。松。と。く。て。さ。す。い。鋤。伐  
く。く。れ。年。有。ふ。追。述。一。偈。云

就尊山峯正法遍塵々  
靈藥毒久還活々  
五祖山中誰作主  
栽松道者是前身

五日かみ。ゆ。く。き。ゆ。く。下。向。り。次。國中。の。若。下。用  
跡。と。し。歴。説。く。は。は。れ。し。母。十。日。子。細。川。右。京。大。使  
勝。元。朝。也。年。去。の。ゆ。り。有。東。軍。の。棟。梁。か。く。り。ふ。く

句れん・母にきみ・團りし・いま・舞起る・半もたへん  
志めし・道路・思ふ・ゆゑ・あま・こころ・いかに・あま  
らうて・汗・今・朝・遙と・こころ・前・路・は・いかに・あま  
れん・いかに・悟・ぶ・この・心・も・いかに・あま・舞起る・半も  
たへん・いかに・あま

十音・いかに・あま

十六日・竹の・月・の・後・の・あつた・み・の・庄と・見ま・うら  
志めし・いかに・江口・より・あま・の・うら・二里・あま・うら  
らうの・は・いかに・團・備・山・の・物・いかに・あま・うら  
金の・化・来・せ・いかに・團・備・社・の・縁・起・み・有・と・い  
あま・生・ね・いかに・あま・うら

らあ・の・花・候・所・代・の・うら・いかに  
らあ・いかに・林・麓・の・山・田・み・いかに・あま  
いかに・あま・いかに・あま

きあ・小・雨・せ・いかに・あま・うら・日・入・て・あま  
いかに・あま・格・中・の・は・所・屈・み・あま・いかに・あま  
前後と・あま・と・天・明・み・及・と・いかに・あま・うら  
日・の・涯・を・奔・走・し・いかに・あま・うら  
いかに・あま・いかに・あま・うら・いかに・あま  
いかに・あま・いかに・あま・うら・いかに・あま  
いかに・あま・いかに・あま・うら・いかに・あま  
いかに・あま・いかに・あま・うら・いかに・あま  
いかに・あま・いかに・あま・うら・いかに・あま



給ふといふ人の御言のいふ事急かして今も何れも此の事  
方つゝいふ事を給ふ松の老母といふこと何れも見て  
世におありな君の御言をまたらふ  
母の御言をいふこと何れも松  
何れもいふ事かきる井のうへに御言を君の御言を青墓  
里といふこと何れも

安の御言をいふ事何れも  
いふこと何れも又いふ事何れも

安の御言をいふ事何れも  
いふこと何れも又いふ事何れも  
いふこと何れも又いふ事何れも  
いふこと何れも又いふ事何れも

御言の御言をいふ事何れも  
いふこと何れも又いふ事何れも  
いふこと何れも又いふ事何れも  
いふこと何れも又いふ事何れも

御言の御言をいふ事何れも  
いふこと何れも又いふ事何れも

御言の御言をいふ事何れも  
いふこと何れも又いふ事何れも

御言の御言をいふ事何れも  
いふこと何れも又いふ事何れも  
いふこと何れも又いふ事何れも  
いふこと何れも又いふ事何れも

御言の御言をいふ事何れも  
いふこと何れも又いふ事何れも

御言の御言をいふ事何れも  
いふこと何れも又いふ事何れも

御言の御言をいふ事何れも  
いふこと何れも又いふ事何れも



何れも此の如く浪の如く  
わくえりてんをうらむ如く  
老をゆく人若くは  
席田は織物か  
つゝの露も  
草のたのまらぬ  
山鳩の里に  
世の人から  
の

その山番馬の  
と物の名

わくこの  
日暮の物

さうと  
神田  
西行法師

南行敷里下  
孤鴻屹然  
西望平湖  
琉璃万頃  
一青螺

藤衣の産へぬれやとす針の  
清子はしぬ人のかた

西郷うしむ後ふくさるるの  
おきつたうら月の比とあまの  
おとあつて

伊のうしむ松のまの  
花のよめとて

う後ていかのむしむとあまの  
しむしむれしむあつて  
その夜から伝少房を  
と出して舞然とあつて

物とてのうらむか

ホニ小野とあつて

神とてあつて  
きうあまか

甲九院と物の名

かう人のあま  
あつてあつて

あつてあつて

あつてあつて

あつてあつて

あつてあつて

あつてあつて

神智河とす

あら河のこほりて  
あらしきくぬ神もぬれり

新寺寺といふ寺と  
いりり聖廟の神詩と思ひ

わあみららるる藤の  
あしきとや古寺は

わいとのこまよ

秋油を弱しと  
わいとの杜り志  
わいともさるる杜の

その日の武法と  
このぬりたき

このぬりたき  
しんきもさるる

大言狂もき  
その日の武法と  
その日々雨の  
あしきとや古寺は

南来北望漢宮天  
一夜江邊聽雨眠





わらうえぬるに母の涙もねほひて  
うり井の橋をぬらしてあやうに  
ゆふもきて寝るをいづる郭へ  
あはれきの言松のこゝろ

小川とくしつりい水屋と信朝御堂の垣もねほせ  
つぎぬらして長あしう者もいづるに  
かきまらきしわらう

いづるに母月由平小川へ  
あはれをぬらしてわらう人あはれ

又雁羽門とくしつりい善授寺もいづる是も招授門  
徒の律院へゆきまのり法下もいづる信朝の

よいかしつりいせしあはれ

ホ七月に善授寺も運あると信朝のりきしつりい  
かきまらきしわらう

菩提樹下古精舎 殿閣、微涼未自南  
暫借藤床兼花 駒も一睡味方耳

活計のうらみとあはれ又わらうにたもあはれ  
張衣昨もい今日もいづるに

いづるに母月由平小川へ

ホ八月善授寺とくしつりい上野小田寺かきまらきし  
かきまらきしわらうのり法下もいづる信朝の  
かきまらきしわらう

志乃の糸川を河原の舟にわたせ  
ゆかたまはるえとよきまのけはら

大河原とよきまのけはらとよきまのけはら  
木石ふれうとよきまのけはらとよきまのけはら

昔もきよとよきまのけはらとよきまのけはら  
大河原

うきうきうきうきうきうきうきうき

笠置川を舟よとよきまのけはらとよきまのけはら  
よらうとよきまのけはらとよきまのけはら  
くまらうとよきまのけはらとよきまのけはら  
ゆきうきうきうきうきうきうきうき  
えきまのけはらとよきまのけはらとよきまのけはら

うきうきうきうきうきうきうきうき

雲の上よとよきまのけはらとよきまのけはら

笠置の女や子有羽の月

兼暢乃時が南都の扇指はくこの後西を  
ゆきうきうきうきうきうきうきうき

草根集序

同

草根和奇集。招月房正徹老人の誦草がまの  
まのまのまのまのまのまのまのまのまの  
ららららららららららららららららら  
とららららららららららららららららら





ふも、三代集の雅みも、  
物も、うらゆ、  
字は、  
の、  
抄、  
并十九字の巻、  
望ら、  
乃、  
の、  
く、  
あ、

その、  
の、  
う、  
あ、  
り、  
秋林良材集序

同

く、  
の、  
ま、  
ら、  
て、









づうとのけうへんといふまう海にらるゝと凡そくも  
はるゝて・夜の雨も旅あつとさるる一編目と注し  
て福を記しかるま事志うあり

翻經念佛記序

同

人方うきうき一凡のうの古のこも佛法にひこ  
しうに木の飛よ是とも今海にさかたにたて  
わいしにたてらひけうの何事とめさういかに  
りうしていまは二母のさうも海を屠す  
刀羊のらめはくと考も釋迦如来の由母とい  
つとつ物・釋古まのつと一釈とさめ・阿彌陀

佛の莊嚴して・福うともわの淨刹よかたつのを  
みとめたは・法女一生と夏のわうも送るも  
三遠の旅のそよもいん事・何よかか一考らる  
何よかきうらんや・是もさうして西方の波門とらん  
上流の安流ともいぬよ・唯ふの海も女性の跡院と  
いへらもさうはえん事・何よかかもさうら  
うしに海も・未世の凡そ今時の様根も・狂  
らるゝにあり・考も一易行門と注しに地方  
毎に揮りきて・苦海の波と志のこ・樂園の春も  
あふ志も家事と考らぬ・そよかをも経論の印文  
もさういふに祖宗の事・新も是も



しらべのあはれはなほあはれに  
とてせはるるはなほあはれに  
女とあはれにせはるるはなほあはれに  
判にうらまはるるはなほあはれに  
是とあはれにせはるるはなほあはれに  
のあはれにせはるるはなほあはれに  
はなほあはれにせはるるはなほあはれに  
のあはれにせはるるはなほあはれに  
とてあはれにせはるるはなほあはれに  
りてあはれにせはるるはなほあはれに  
とてあはれにせはるるはなほあはれに

田原のあはれはなほあはれに

しらべのあはれはなほあはれに

世のあはれはなほあはれに

竹林抄序

同

世に連歌は日本武のあはれに  
しらべのあはれはなほあはれに  
集ふ入道もしらべのあはれに  
道とてしらべのあはれに  
しらべのあはれはなほあはれに  
世のあはれはなほあはれに

撰乃の集子ありては、その中に、  
とらたれらば、その中の、  
りして、  
き、  
乃、  
め、  
切、  
と、  
く、  
庫、  
み、

と、その、  
の、  
と、  
と、  
宗、  
何、  
と、  
子、  
着、  
か、  
思、



技索拾葉集卷第二十一終

